

火を通して人を考える

アートの現場から

ACCAC通信

国際芸術センター青森（ACCAC）では、現在しまうちみかさんが「ゆらゆらと火、めらめらと土」と題したアーティスト・イン・レジデンス（AIR、滞在制作）に参加しています。彼女はこれまで、ドローイングや彫刻作品などを制作・発表し、過剰に合理化された社会への疑問を投げかけてきました。青森では火にまつわる信仰や人の高揚感についてのリサーチを中心に、テラコッタ作品を中心に制作しています。

最近、しまうちみかさんのスケッチの中に、興味深いものを見つけました。一人の人間の体の側面の一方が赤い光に照らされて、もう一方が青い光に照らされています。尋ねると、昔からある火の色は赤いですが、現代の火（明かり）は

青いと、火のそばで顔が照らされるとき私たちの顔は赤くなるが、スマートフォンを操作していれば青く光ると、その様子を考えながら描いたと話してくれました。

これは現代の状況をとっても端的に表していると思います。近代以降に火は町から姿を消し、電気が取って代わるようになります。電灯が一般化して、今では手元のスマートフォンが光を発します。太陽が燃えている

ため地球は照らされるように、火の元と光源や熱源は同一だったはずが、現代は分離されて火は隠されていると言えるでしょう。一方で、ねぶた祭など火祭りを見る私たちの顔については、両方の光に照らされる様子が目に浮かび、未だ火と関わりは残っているのだと感じさせられます。また、しまうちみかさんは、ネット上の誹謗中傷や炎上が、人が自身の野蠻さをコントロールする術を見失っていることの表れに見えるとも言います。先史時代から生きるために共に火を囲んできた人間は、今となってはそれぞれが火を模したものを

手元に持つことができたものの、火の恵みを分かち合うということを忘れたのかもしれない。

秋の種2020「しまうちみか展 自立について 世界は想像した以上に私を受け入れてくれるはずである」の会場＝福岡アジア美術館企画展示室C、Photo: Toudou Miyuki



ここまでつらつらと、しまうちみかさんのリサーチから見えてきた火について書き連ねてきましたが、まさに火について考えること

は私たち人間を考えてみることだと言えます。公開・協働制作「野焼き」を行って、テラコッタ作品を制作し、7月31日（土）から始まる、AIRと同名のしまうちみかさんの個展では、新作発表も予定しています。オープニングには、午後2時半からアーティスト・トークも開催します。会期中は公開制作も行い、展示作品が増えていく予定です。「ゆらゆらと火、めらめらと土」を通して、火について、考える機会になればと思います。ぜひご来場ください。

（青森公立大学国際芸術センター青森学芸員 村上綾）
※第1金曜日掲載